

第 52 回 Society of Toxicology (SOT) 学術年会派遣報告② ー サンアントニオでの教育コースに参加して ー

東北大学大学院薬学研究科 吉成 浩一

SOT 第 52 回学術年会は、2013 年 3 月 10 日から 14 日まで、テキサス州サンアントニオの Henry B. Gonzalez コンベンションセンターで開催された。私は日本毒性学会の SOT 教育コース派遣事業の一環として「Basic Principles of Human Risk Assessment」及び「The REACH Regulation and Safety Assessment Approaches for Chemicals That Come in Contact with the Skin」の 2 つのコースに参加させて頂いた。

前者はリスクアセスメントの基本を学ぶコースで、参加者も学生やポスドクと思われる比較的若い研究者が多かった。化学物質のヒトでのリスク評価を行うには、「有害性確認」、「用量反応評価」、「暴露評価」が必要であるが、本教育コースではその流れにしたがって講義があった。このコースで印象的だったのは、4 名の講師の事前打ち合わせにより、2-butoxyethanol をモデル化合物として各セッションで具体的な方法論が説明されたことであった。これにより、リスク評価における各ステップの意義が明確になり、非常にわかり易かった。

後者のコースでは、REACH における皮膚毒性の評価方法と関連する代替試験法が紹介され、より現実的な内容であった。参加者数も少なく、おそらく企業等で実際に皮膚毒性を担当されている方が多かったのではないと思う。スペースの都合で詳細は割愛するが、REACH の概略説明に続き、実際に用いられる腐食性・刺激性、感作性、透過性に関する様々な代替試験法が具体的に紹介された。

私は所属先で薬学部 4 年生を対象とした「毒性学」の講義を担当しているが、今回、リスクアセスメントに関して体系的な講義を受ける機会を頂き、今後の講義や研究活動に非常に参考となった。皮膚毒性に関しては、まだ講義に活かしていないが、ある研究プロジェクトにおいて REACH を含む欧州における化学物質の規制と代替試験法開発の現状を理解する必要があり、比較的代替試験法の開発が進んでいる皮膚毒性に関する教育コースを受講できたことは、今後の研究活動に非常に有益であった。

学術年会一般発表では、最先端の基礎研究だけでなく、EPA や FDA など米国の規制当局の発表を見て議論することができ、SOT が毒性学の基礎から応用、そしてレギュラトリーサイエンスの情報収集の場として素晴らしい場所であることを実感した。

また、学会以外でもサンアントニオを満喫させて頂いた。サンアントニオは日本人には馴染みのない街と思われるが、アメリカ国内では有数の観光都市であり、昼夜を問わず多くの観光客で賑わっていた。また、サンアントニオは NBA の強豪スパーズの本拠地として有名である。幸い会期中にホームゲームがあり、勝利ゲームを見ることもできた。

最後になりましたが、今回 SOT 教育コースに参加する機会を与えて頂きました日本毒性学会に深く感謝いたします。

